The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ヒンディー語映画音楽における感情語
Author(s)	チョクシー, ニシャーント
Citation	印度民俗研究. 2017, 16, p. 27-41
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/60692
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ヒンディー語映画音楽における感情語

ニシャーント・チョクシー

はじめに

日本語学では、オノマトペとも呼ばれる感情語[1]が盛んに研究されている。南アジアの言語である、ドラヴィダ語族、インド･アーリア語、オーストロアジア語族は、いずれも感情語を多数持っている（Emeneau 1969）にもかかわらず、ヒンディー語のような話者の多い言語ですら研究はほとんどされていない。この論文では、ヒンディー語の映画音楽を用いて、ヒンディー語の感情語について論じる。インドは、多言語使用の国であるため、北部インドの話者にとって、ヒンディー語はしばしば第二言語や、第三言語である。しかし、ヒンディー語の映画は、インド北部、パキスタン、アフガニスタン、さらにネパールで、広く上映され観られており、非母語の話者にとって、ヒンディー語の重要な情報源である。そして、ヒンディー語の映画音楽は、多くの感情語を含んでいる。

まず、ヒンディー語の重複形の観点から、感情語の形態論的構造について論じる。次に、20 世紀半ばから現在までの、ヒンディー語の映画音楽のデータを用いて、同じ語が副詞、名詞、動詞、形容詞のような品詞になりうるという、感情語のいくつかの統語的性質を示す。このことはヒンディー語において、感情語が別個の語のクラスを形成しつつも（Diffloth 1979）、動詞といった散文的文法における範疇にも統合できるということを示している。また、本論のデータは感情語の詩的機能も明らかにする。すなわち、恋愛に間接的に言及する際に、非生物の対象を生物として扱うという働きである。このことを、ヒンディー映画の美的感覚に関連して論ずる。なお、翻字には IPA を用いた。

ヒンディー語における重複

重複は、語族にかかわらず、南アジアの全ての言語において一般的で、生産的な特徴である（Abbi 1985）。ヒンディー語では、Mohan （2006, 119-120）が 3 種類の散文における重複形について述べており、次のように要約される。

---

[1] 「感情語」は、長田（2009）が使ったようであるが、本来はディフロスの expressives の定義を引くものである。本稿では、オノマトペより広く捉える。

1) 語全体を重複させる：継続や反復の状態を表すために、語を繰り返す。

baiʈhe ‘sit’ *baiʈhe-baiʈhe* ‘while sitting’

da:ne ‘grain’ *da:ne-da:ne* ‘each grain’

2) 語の一部を重複させる（echo-formation）：元の語の先頭子音が重複部でｖに置き換えられて繰り返され、「など」の意味が加わる。

kha:

na: ‘food’ *kha:na:-va:na:* ‘food, etc.’

roti ‘flatbread’ *roti-voti* ‘flatbread, etc.’

3) 冗長な複合語：同じ意味をもつ 2 つの単語を並べる。時に、音韻的にも類似した語であることがある。これも、「など」の意味が加わる。

dhən ‘wealth’ *dhən-dəulət* ‘wealth-wealth’

dhərm ‘religion’ *dhərm-ima:n* ‘religion-religion’

Mohan は、ヒンディー語の 4 種類目の重複形として、‘感情語の’重複形をあげている。彼は、感情語の重複形について、「音節の繰り返しからなる、意味を持つ最小の単位で、分節できない形態素である」（minimally meaningful and segmentally indivisible morphemes which are constituted of iterated syllables, Mohan 2015: 119）としている。しかしながら、彼は、感情語の最も基本的な形しか例に挙げていない。それは、1 つの単音節の形態素が繰り返されるというものである。

ʈəp-ʈəp ‘sound of water dripping’（水のしたたる音）

cit-cit ‘sticky’（ねばねば）

この記述だと、多岐にわたるヒンディー語感情語の重複の説明としては不十分である。というのは、感情語では、語の一部を重複させることも可能なのである。その際の重複法は、echo-words（上記の 2）とは異なり、多種多様である。

C_1VC-C_2VC

rim-jhim ‘sound of rain falling’（雨だれの音）

jhil-mil ‘shining’（ピカピカ）

CV_1C-CV_2C
dhək-dhuk ‘heartbeat’（心臓音、ドキドキ）
ʈa:pur-ʈupur ‘rain falling’（雨降りの音）

部分的な重複に加えて、元の語の一部がコピーされる場合もある。これは、C_2の場所にある鼻音で特によく起こる。こういった形は映画音楽でよく見られる。

$C_1V_1C_2V_1C_2V_1$-$C_1V_1C_2(V_1)$
jhənənə-jhən ‘sound of foot anklets’（アンクレットの音）
ghənənə-ghənə ‘sound of thunder’（雷の音）

ヒンディー語の感情語の形態法は生産性が高く、さらに多様な組み合わせが可能である。感情語は、一般的な重複のパターンを踏襲しているが、上記の例から、比較的単純な散文の重複形と同じではないことが分かる。このことは、統語上の柔軟さ、意味の幅、有生化の特性と共に、感情語がヒンディー語において別個の語のクラスをなしていることの根拠となる。

ヒンディー語の映画音楽における感情語

ヒンディー映画は、南アジアにおいて歴史が古く、数も多い。毎年 800 以上の映画が作られている。ヒンディー語使用地域の外側にある、インド西部の多言語都市 Mumbai（Bombay）に業界の中心があることから Bollywood と呼ばれている。そのような背景から、ヒンディー映画に使われる言語は、インドの多くの地方語、英語、そしてウルドゥー語の影響を受けた独特のものである(Trivedi 2006)。ほとんどの商業的映画に、歌と踊りのシーンがあり、歌に使われている言語もまた独特で、映画中のセリフに使われている言語とも異なる。セリフに比べて、歌詞では、より多くのペルシャ語由来の語句が使われている。実際、ヒンディー語の歌の作者たちは、元々ウルドゥー語の詩人であることがある。更に、歌、特にラブソングには、たくさんの感情語が使われている。この理由のひとつは、ヒンディー映画にお

いて、「ラブソングは、もっぱら身体的で、具現化しているもので、観客に、歌手のイメージや歌詞の感情を直接かつ介在物なしに伝えている」(Sarrazzin 2008, 405) からである。感情語は、直接の官能的体験を容易にしている。

感情語はこのように、直接の官能的体験への観客の理解を助けるが、それだけでなく、「詩的秘匿」"poetic veiling" (Sarrazzin 2008, 396)にも使われる。これは、ラブロマンスが、凝った暗喩を用いて表現されるときに起こる。こういった暗喩は、女性のアンクレット（足首の飾り、*pa:yəl*）といった物体、雨や星といった自然物、心臓やまなざしといった体の部分に関わっている。感情語はこれらの物を統語的に操ったり、無生物を本来有生物をとる動詞の動作主として機能させたりする。

pa:yəl 'anklet'

pa:yəl は南アジアの女性がつけるアンクレットのことである。このアンクレットにはベルが付いており、この鈴の音は、インドの古典ダンスによく見られる特徴となっている。ヒンディー映画では、アンクレットは感情語を用いて描写され、男女間の愛のメタファーとして機能している。

jhən

1) *jhənək-jhənək-jhən tori ba:je pa:yəlia* [Mere Huzoor, 1968]
EXP your SG ring anklets
'Your anklets ring *jhənək-jhənək-jhən*.
「あなたのアンクレットが *jhənək-jhənək-jhən* と鳴る。」

2) *jhənənənə-jhən jhənənənə-jhən jhənənənə ba:je pa:yəlia* [Rani Roopmati, 1959]
EXP ring anklets
'The anklets ring *jhənənənə-jhən jhənənənə-jhən jhənənənə*'
「アンクレットが *jhənək-jhənək-jhən* と鳴る」

3) *jhənən-jhən-jhəna: ke əpni pa:yəl chəli: main a:j* [Aashiq, 1962]
EXP CONJ REFL-GEN go I today
'I left today with having *jhənən-jhən-jhən*-ed my anklets'
「私は今日アンクレットを *jhənən-jhən-jhən* させて、行った。」

4) *jhən-jhənənənənənənənə-jhənənənənənənənə-jhən pa:yəl bole*　[Nazrana, 1987]
　EXP　　anklet speak
‘My anklets said *jhən-jhənənənənənənənə-jhənənənənənənənə-jhən*.’
「私のアンクレットが、*jhən-jhənənənənənənənə-jhənənənənənənənə-jhən* と言った。」

基本形の *jhən* は CVC である。上記の例では、語全体の重複は受けていないが、核とコーダが 6 回も（例 4）反復して繰り返されている。この反復は普通、最後のコーダがない状態で、核で終わり、それから、基本形が最後に付加される(CVCVCVCV-CVC)。この繰り返しは、映像面では踊りの振り付けを伴っていることがある。

感情語は、さまざまな統語上の機能を持ちうる。もっともよくあるのが、動詞 *ba:je* ‘to ring.’を修飾する副詞として使われる場合であるが、例 3 では、感情語が動詞として働いており、ヒンディー語では動詞にしか付かない *-ke* という接辞が感情語についている。これは、最後の繰り返しの音節の最後の母音を低母音化することで起こっており、[*ə*]が[*a:*]になっている。接中辞[*a:*]は、ヒンディー語散文の文法においては、動詞を使役形にするときに用いる。これは、音の遊びを通して、感情語の重複が文中の感情語の統語機能をどのように変えるかの一例である。

jhən を伴う典型的な動詞は、‘ring’ *baje*（鳴る）であるが、例 4 では、アンクレットが喋っている（*bole*）。ヒンディー語の動詞 *bolna:* ‘speak’は有生の動作主をとるが、感情語を伴う際には、アンクレットが動作主となって、有生となる。このように感情語は詩的秘匿を助ける。感情語が動作主を有生化することは、ケチュア語など他の言語にも見られる (Nuckolls 1996)。

chəm/chən

5) *mori chəm-chəm ba:je pa:yəliya*　[Ghunghat, 1960]
　my　EXP　　ring　anklets
‘My anklets ring *chəm-chəm*’
「私のアンクレットが *chəm-chəm* と鳴る。」

6) *main na:chu　a:j chəm-chəm*　[Baaghi, 2016]
　I　dance　today EXP

‘I dance today *cham-cham*’
「私は今日、*cham-cham* 踊る。」

7) *chən-chən pa:yəl ba:je* [Neend, 1959]
EXP anklets ring
‘The anklets ring chan-chan’
「アンクレットが chan-chan と鳴る。」

8) *yeh jo teri: pa:yəl ki: chən-chən hai* [Masoom, 1996]
this REL your anklet POSS EXP COP
‘This which is the the *chən-chən* of your anklet’
「これが、あなたのアンクレットの *chən-chən* だ。」

9) *chum-chənənənə pa:yəl boli:* [Ghar Ghar Men Diwali, 1955]
EXP anklet spoke
‘The anklets spoke *choom-chananana.*’
「アンクレットが *choom-chananana* と話した。」

感情語基本形 *jhən* の変種は *chəm* か *chən* である。*jhən* と同様に、この感情語も頭子音に破擦音、コーダに鼻音というパターンである。おそらく、破擦音-鼻音という組み合わせがヒンディー語において、アンクレットの鳴る音の象徴素になっているのだろう。*jhən* とは違って、*chəm* は、Mohan のいう語彙の全反復に典型的に従い *chəm-chəm* となる。しかし、例 9 ではそうはならず、基本形の核とコーダが反復され、例 2-4 のようになっている。

統語的には、感情語は、*ba:je* ‘ring’ の副詞として機能するのだが、例 6 では、動詞 *na:chu* ‘dance.’を修飾している。この歌では、アンクレットは言及されないが、*cham-cham* と感情語を歌う際、女優が足を空中に蹴り上げるように踊る。おそらく、この感情語は、ヒンディー語映画の愛好家にとって、足首にアンクレットを付けて踊る女優のイメージを想起させるものであり、それが映画においてごく標準的なイメージであることは、制作された 2016 年においてもアンクレットへの言及すら必要なかったことから窺われる。例 8 においては、感情語は名詞として機能しており、アンクレット

の動きの修飾というよりは、アンクレットの持つものとされている。最後に、例 9 では、例 5 のようにアンクレットが感情語を「喋って」有生物の動作主としてふるまっているのが見られる。例 9 でも感情語の形が異なっていて、基本形の母音を奥舌化して、接頭辞として付けることで、*chum-chən* という形になっている。

dil/ji:ya:ra: 'heart'「心」

dhək

10) *dhək-dhək karne laga: ho mere ji:ya:ra: darne laga:* (Beta 1992)
EXP do start my heart scared start
'My heart began to *dhək-dhək*; my heart started to get scared.'
「私の心が *dhək-dhək* しはじめた；私の心がおびえ始めた。」

11) *dhək-dhək se dhəɖkna bhula: de chən-chən se chənəkna sikha de* (Aasha 1988)
EXP INST EXP-INF forget-CAUS EXP INST EXP teach-CAUS
'Make me forget my *dhaɖak* with your *dhək-dhək*, teach me to *chənək* with your *chən-chən*'
「あなたの *dhək-dhək* で、私の *dhaɖak* を忘れさせて、あなたの *chən-chən* で *chənək* することを教えて」

12) *ji:ya:ra: dhək-dhuk hoi* [English-Vinglish 2012]
heart EXP be-SUBJ
'My heart is going *dhək-dhuk*'
「私の心が *dhək-dhuk* しそうだ。」

13) *dil dhəɖək-dhəɖək ke de rəha: hai səda:* [Madhumati, 1958]
heart EXP CONJ give PROG COP cry
'My heart having gone *dhəɖak-dhəɖak* is giving a cry.'
「*dhəɖak-dhəɖak* して私の心が叫んでいる。」

心音を表す感情語 *dhak* は CVC の形に従い、頭子音に歯閉鎖音が、コー

ダに軟口蓋閉鎖音がきている。末尾子音に軟口蓋閉鎖音がくることは、ヒンディー語の感情語に共通する特徴であり（例 1 参照）、また南アジアの言語にも一般的に見られるとされる(Emeneau 1969)。この感情語は、音節全体を重複させるか（例 10、11）、重複部の母音を奥舌化するか（例 12）、そり舌閉鎖音を内側に添加するか（例 13）である。内側に添加する形のとき、この感情語はきわめて一般的な動詞 *dhaḍəkna:* 「ドキドキする」の語基となり、例 11 だと動名詞として機能している。この自立した動詞に加えて、ヒンディー語に一般的な動詞句形成法として、軽動詞 *karna:* 'to do' と共に使われる場合もある（例 10）。他には、接続法と共に用いられたり（例 13）、コピュラを伴ったりする（例 12）。最後に、例 13 では、感情語が「心」を有生化して、人間の声と関連するアラビア語由来の語である *səda:* 'cry' 「叫び」をあげている。

***Bərsa:t/sa:vən* 'rain'「雨」**

rim-jhim

17) *rim-jhim gire sa:wən* [Manzil, 1979]
EXP fall rain
'The rain (of Sawan month) falls *rim-jhim*'
「（サーワン月の）雨が *rim-jhim* と降る。」

18) *rim-jhim rum-jhum bhi:gi rutu men həm tum* [1942: A love story, 1994]
EXP wet season in me you
'You and I in the *rim-jhim rum-jhum* wet season'
「あなたと私は、*rim-jhim rum-jhum* な雨季にいる。」

19) *rim-jhim ke gi:t sa:wən ga:ye* [Anjana, 1979]
EXP CONJ song rain sing
'Having done *rhim-jhim*, the rain sings a song'
「*rim-jhim* して、雨が歌を歌う。」

20) *rim-jhim ke təra:ne le ke a:yi: bərsa:t* [Kala Bazaar, 1960]

EXP CONJ song bring CONJ came rain

'Having done *rhim-jhim*, the rain came with song'

「*rim-jhim* して、歌を持って、雨が来た。」

rhim-jhim という感情語は、C_1VC-C_2VC 形で、頭子音の子音/r/＋/jh/が、交替して現れる。有声の破擦音/jh/は、このタイプの組合わせの片一方にしばしば起こる頭子音である。*dhək* や *chəm* のように母音の奥舌化が起こりうる。しかし他の感情語と異なり、例 18 が示すようにコピー要素では起こらない。代わりに、句全体が重複するときに奥舌化が起こる（C_1V_1C-C_2V_1C-C_1V_2C-C_2V_2C）。この感情語は、副詞としても（例 17）、形容詞としても（例 18）、そして動詞としても（例 19, 20）機能する。例 19、例 20 の両方で、*ga:na:* 'to sing' と *la:na:* 'to bring' と共起している動作主の「雨」を感情語が有生化している。

ʈip

21) *ʈip-ʈip bərsa: pa:ni:* [Mohra, 1994]

EXP rains water

'Rain falls *ʈip-ʈip*'

「雨が *ʈip-ʈip* 降る。」

22) *ʈip-ʈip ʈip-ʈip ba:ri:sh shuru: ho gəi:* [Afsana pyar ka, 1991]

EXP rain start be-PST

'The rain started *ʈip-ʈip*'

「雨が *ʈip-ʈip* 降り始めた。」

23) *ʈip-ʈip ʈip-ʈip pəɖe bu:ndəniya:* [Prayashchit, 1977]

EXP fall drops

'Drops [of rain] fall *ʈip-ʈip*'

「雨粒が *ʈip-ʈip* 降る」

感情語 *ʈip* は、雨が降り始めたとき雨粒がしたたることを含意している。CVC 型で、1 度繰り返されることもあれば（例 21）、4 回ひとくくりで使

われることもある（例 22 と 23）。副詞として（例 21、例 23）、または形容詞として機能（例 22）している。

視覚的感情語

ヒンディー語映画に登場する感情語の多くが、音を表現する語だが、視覚的な含意をもつ感情語もある。

jhil-mil ‘shine, glitter’

24) *jhil-mil sitaːron kaː aːngən hogaː* [Jeevan Mrityu, 1970]
EXP stars POSS courtyard be-FUT
‘There will be a courtyard of jhil-mil stars.
「*jhil-mil* な星々の中庭でしょう。」

25) *jhil-mil jhil-mil saːɾiː choliː* [Prem Jyoti, 1985]
EXP sari blouse
‘*jhil-mil jhil-mil* sari and blouse‘
「*jhil-mil jhil-mil* なサリーとブラウス」

26) *Sona: kare jhil-mil Ruːpa: həse kaise khil-khil* [Paheli, 1977]
Sona (gold) do EXP Rupa (silver) laughs how EXP
‘Sona shines *jhil-mil*, and how Rupa laughs, *khil-khil*’
「Sona は *jhil-mil* と輝き、Rupa の笑い方は *khil-khil*。」

これもまた、C_1VC-C_2VC 型の感情語である。*rim-jhim* と同様に、頭子音のうちの 1 つが有声の破擦音であるが、意味は大きく異なる。形容詞として（例 24、25）、あるいは動詞として機能している（例 26）。星や、女性の服など、様々な名詞を修飾でき、日本語では「キラキラ」にあてはまる。例 26 では、感情語の、有生化を起こすという特徴が、掛詞を成立させている。Sona は ‘gold’「金」という意味だが、男の名前でもある。感情語は通常は、無生物の名詞を修飾するが、この例では、「金」が輝いているだけでなく、その様態が、恋人の様子にも当てはめられている。

jhuki-jhuki ‘downcast’「うなだれた」

27) *jhuki-jhuki si nəzər beqəra:r hai ki nahi:n* [Arth, 1982]

EXP DIM glance restless COP or not

‘Is your *jhuki-jhuki* type glance restless or not’

「あなたの *jhuki-jhuki* な一瞥は落ち着きがないのか」

28) *yeh teri: a:nkhen jhuki jhuki yeh tera: chəhera: khila: khila:* [Fareb, 1996]

this your eyes EXP this your face EXP

‘Your eyes are shining *jhuki-jhuki* your face is glowing *khila:-khila:*

「あなたの目は *jhuki-jhuki* と光り、顔は *khila:-khila* とほころぶ。」

29) *jhuki jhuki sajḍe men jhuki: jhuki: ya:ra* [Chocolate, 2005]

EXP submission in EXP friend

‘I am *jhuki: jhuki:* in [your] *jhuki-jhuki* submission [Islamic prayer posture toward Mecca], my friend’

「（あなたの）*jhuki-jhuki* な服従の姿勢[メッカに向かってする祈りのポーズ]に、私は *jhuki: jhuki:* です、友よ。」

jhuki-jhuki は、これまで例に出てこなかった CV_1C+V_2型をもち興味深い。この型はやはり視覚的な感情語である例 28 の *khila:-khila:* ‘glowing’「紅潮する様子」など、他の感情語にもある。この語構造が、視覚的感情語に限られたことなのかは不明で、さらなるデータが必要であろう。この感情語は形容詞として機能している。また、有生化の特性は持っていないようである。

結論

本研究は、ヒンディー語の映画音楽に使われている感情語の、ごく一部を扱った。この論文で示したように、ヒンディー語の映画音楽に使われている感情語は柔軟性に富んでいる。感情語は、文中で名詞、動詞、形容詞、そして副詞として現れることができ、本来有生の動作主をとる動詞が、無生物の動作主をとるという形で、無生物の動作主と共に使われる。統語上の柔軟性と、有生化の特徴をもっているため、ヒンディー語映画音楽で重要な美的要素である、暗喩による「詩的秘匿」に、感情語は非常に適して

いる。

統語上の柔軟性と、有生化を起こす特性に加えて、これらの感情語は多様な音素パターンを持っている。語基の標準的な形は CVC 型だが、感情語を形成するために何らかの重複形が使われることがある。しかしながら、その重複の方法は多種多様で、語全体の重複、echo-word、冗長な重複形といった、散文文法における重複形とは異なっている。語基が連続して重複することや、コーダが鼻音である場合「鼻音＋V」が幾度か繰り返されることがある。重複する際には、母音交替も（特に/ə/ か /i/ から /u/）、子音交替も（特に有声有気破擦音/jh/ への）、両方起こりうる。

ヒンディー語の感情語は、明らかに、ヒンディー語に象徴素があることを示している。感情語の音素パターンと、感情語の意味には関連があるだろう。それを示すには、ヒンディー語の映画音楽に使われている感情語が他の言語形式でも存在しているのかといった、ヒンディー語の日常会話や文学における感情語の研究を進める必要がある。また、ヒンディー語の映画音楽はヒンディー語以外の言語の影響を受けており、ヒンディー語映画音楽に出てくる感情語は、南アジア言語の感情語のより広範な調査を始める出発点ともなりうる。

謝辞

Nathan Badenoch 博士、長田俊樹博士から本稿に貴重な助言を頂いた。また日本語での執筆に当たっては、前職である東京大学言語学研究室の今井響子氏にご教示頂いた。ここにお礼申し上げる。本研究は科学研究費補助金 <P16744> および 26370475 によるものである。

略号表

ABL-Ablative
CONJ-Conjunctive
COP-Copula
DIM-Dimunitive
EMPH-Emphatic postposition
EXP-Expressive
FUT-Future
GEN-Genitive
INF-Infinitive
INST-Instrumental
IMP-Imperative
POSS-Possession postposition
PROG-Progressive
PST-Past
REFL-Reflexive
SUBJ-Subjunctive

参考文献

Abbi, Anvita. "Reduplicative structures: A phenomenon of the South Asian linguistic area." *Oceanic Linguistics Special Publications* 20 (1985): 159-171.

Diffloth, Gérard. "Notes on expressive meaning." *Chicago Linguistic Society* 8:44 (1972): 440-447.

Emeneau, Murray B. "Onomatopoetics in the Indian linguistic area." *Language* (1969): 274-299.

Mohan, Shailendra "Echo-Word Formation in Hindi." *Indian Linguistics* 67 (2006): 119-126.

Nuckolls, Janis B. *Sounds like life: Sound-symbolic grammar, performance, and cognition in Pastaza Quechua*. Oxford: Oxford University Press, 1996.

長田俊樹　2009「ムンダ語の感情語」大西・稲垣（編）地球研言語記述集 2　言語記述研究会　総合地球環境学研究所インダスプロジェクト pp. 35 – 67.

Trivedi, Harish. "All kinds of Hindi: The evolving language of Hindi cinema." *Fingerprinting Popular Culture: The Mythic and the Iconic in Indian Cinema*. Vinay Lal and Ashis Nandy, ed. 2006. New Delhi: Oxford University Press, 51-86.

Sarrazin, Natalie. "Celluloid love songs: musical modus operandi and the dramatic aesthetics of romantic Hindi film." *Popular Music* 27:03 (2008): 393-411.